

熊野の
森から



田子沖に浮かぶ双島(そうしま)。

怪し ヒ 熊野

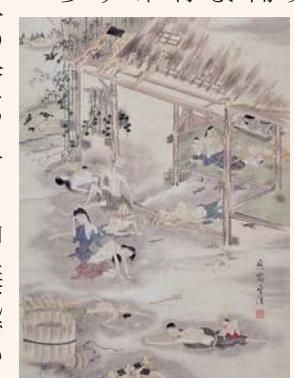
「串本の怪異(其の二)」 其の五 中島 敦司

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
教授
中島 敦司



串本には、海と山をつなぐ怪異話もある。山が海にまでせり出している串本らしい話だ。串本の田子の沖に大きな山と小さな山の二つからなっている双島(そうしま)がある。この島は、今から数百年前頃、どこからともなく一夜にして田子の前に流れてきたという。これだけでも十分に不思議な話であるが、双島の不思議はそれだけではない。この島には水はない。この島には水がないために人は住めないのである。

時、その無人の双島から美しい歌声が聞こえてくるようになり、村人達は気味悪がってますます島に近づかなくなつた。



天明飢饉之図(福島県会津美里町教育委員会所蔵、パリックドメイン)。絵の中を見ると、その惨状、悲しみと娘を哀れと思った大天狗は、海岸で大石を置き、双島には洞を作つて娘の靈を弔つた。田子の前の海岸、枯木灘には天狗が置いたところが見られる大きな石が数千もあり、今でもそれらを見ることができる。

ところが、田子の奥にあるチノト山に棲んでいた若い天狗(てんご)が、声の主が気になつて島に飛んで見に行つたところ、ワンジュウ(ハカマカズラ)の大木から美しい娘が現れた。この娘は「もう一月も水を飲んでいないので、水を飲みたい」と言うので、天狗は田子の池から水を汲んで飲ませた。天狗は、毎夜のように島に通い、いつしか二人は恋仲になつていく。天狗は双島通いの時に大きな羽音を鳴らしたため、村人はおおいに驚き、いつしか「天狗が双島へ夜泊りする」と噂するようになつた。この噂は大峰山大権現の耳にも入り、権現様は修行中の天狗に大峰山に入るよう命じた。天狗は修行を終えたら戻る約束して大峰山に行つて修行を積み、大天狗となつて双島へ戻つて来た。しかし、長い年月で木々は枯れ、ワンジュウの

中島 敦司 (なかしま・あつし) 教授 プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。

専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源地球温暖化、自然エネルギー、民俗妖怪、伝承。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30~50日は訪問し、研究する。

大木も枯れていた。その時代は大飢饉もあって、人々は土地を離れ、一人の村人もいなくなつて悲しみと娘を哀れと思った大天狗は、海岸で大石を置き、双島には洞を作つて娘の靈を弔つた。田子の前の海岸、枯木灘には天狗が置いたところが見られる大きな石が数千もあり、今でもそれらを見ることができる。

江戸時代には大小合わせて三十五回もの飢饉があつた。大洪水や大地震、大火山の噴火による天候不良が発端とされる天明の大飢饉では想像を絶する飢餓が関東や東北を襲い、数十万とも言われる餓死者、疫病死者を出した。和歌山でも多数の餓死者が出たといふ。食を巡つての恐ろしいことも多々あつたようだ。そんな不条理や虚無感は、人々に妖怪の姿を意識させたのかも知れない。